

東京大学大学院総合文化研究科 グローバル地域研究機構中東地域研究センター
[スルタン・カブス・グローバル中東研究寄付講座]



UTCMEES ニュースレター

VOL.18 2021

- | | |
|---|-------------------------------------|
| 1. 教員エッセイ：中東と感染症（鈴木啓之）・・・ 1 | 3. 現地滞在・留学記・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 3 |
| 2. 成果論集『アラビア半島の歴史・文化・社会』の
刊行・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 2 | (1) ロックダウン中のイスラエルにて・・・ 3
(李美奈) |
| | (2) 新型コロナウイルス禍とトルコ留学・・・ 5
(岩田和馬) |
| | 4. スタッフ・発行者情報・・・・・・・・・・・・・・・・ 8 |

1. 中東と感染症

鈴木 啓之

COVID-19（新型コロナウイルス）の世界
的な流行は、中東地域にも例外なく波及
しました。感染者総数が2020年12月
末の時点で100万人を超えているトルコ
とイランはもちろん、総人口あたりの感染
率が世界でも有数の高さとなったイスラ
エル、感染者の正確な把握すら困難なイエ
メンやシリアなど、いずれの国も大きな困
難に直面しています。ラマダンの時期
には、クウェートの通信会社ザインによっ
て、「神は我々をお忘れではない」という
タイトルのコマーシャルが発表されまし
た（文末注1）。マスクの痕が痛々しい医
療従事者が連れだって礼拝をするシー
ンや、無人のカーバ神殿をテレビ中継で見る
家族の描写などは、2020年の世相をよ
く表しています。

中東地域が大規模な感染症に襲われた
のは、これが初めてのことでありませ
ん。それは、日本近世史における麻疹や
天然痘などの流行からも明らかでし

う。2019年に北米中東学会の学術誌
*International Journal of Middle Eastern
Studies* に発表されたIsaac A. Bolaños
による論文は、オスマン帝国期のイラクと
ペルシア湾岸地域における検疫体制の確
立を、ペストとコレラへの対応から論じた
興味深いものです（文末注2）。英領イン
ドを発生源とするコレラがバスラへと初
めて到達したのは、1817年のことでし
た。その結果、1万人から1万5000人の
死者が出るに至ります。この論文の秀逸な
点は、ガージャール朝や英領インドとの境
界線の管理が検疫体制の発展によって厳
格になり、イラクで近代的な国家の形が成
立したのだと論じている点にあります。国
内の公衆衛生も飛躍的に発達し、再びコレ
ラが流行した1899年には10日間の隔
離、外出禁止、消毒、汚染物の焼却などが
徹底されることになりました。また、香港
からペストが世界的に拡大した通称「第三
次パンデミック」の際には、インドにまで

到達したこの病気を食い止めるために、オ
スマン帝国による検疫体制の強化が、英帝
国によって支持されたことが論じられて
います。まさに、国際公衆衛生の実践が、
中東で行われていたわけです。

イラクにコレラが初めて到達してから
およそ80年後に、バグダードを訪れたド
イツ人外交官がいました。駐バグダード
領事代行として赴任したフリードリヒ・
ローゼンです。彼自身も、ペイルート駐在
中の1890年にはオスマン官憲によるコ
レラ検疫に遭遇し——連れだったドイツ
領事の強権で3週間の隔離を回避するとい
う、あまり感心できないエピソードが
述べられています——、テヘラン駐在中
の1892年にはコレラ大流行に際して妻
の罹患を経験しました。煮沸とウィスキー
を用いた消毒、患者の隔離、医師の奔走な
どの記述は、現在のCOVID-19への対策
を否応なく想起させます（文末注3）。そ
の彼の言葉、「疫病の猖獗^{しょうげつ}は、人間の真価
があらわになる大厄の一つである」は、ま
さに至言であると言えるでしょう（文末
注4）。

東京大学中東地域研究センター(UTCMES)の活動も、この1年間は大きな制約を受けました。拠点を置く駒場キャンパスは、COVID-19への対応から2020年4月7日から6月14日まで、事実上の完全封鎖となりました。新入生の勧誘のために準備されていた学生サークルの立て看が、地面に伏せられたままに置かれ、2014年にハーリド・アル＝ムスラヒ駐日オマーン・スルタン国大使(当時)からキャンパスに寄贈された二株のバラも、無人のキャンパスで花の季節を終えました。その後、UTCMESでは、運営会議をオンラインへと移行し、パフーン文庫の利用も制限する状態が続いています。私自身も、はじめてのオンライン授業に多くの時間を割くことになりました。そのようななかで、日本エネルギー経済研究所中東研

究センター、千葉大学新学術領域研究「グローバル関係学」との共催のもとで、「新型コロナウイルスと中東」と題した連続のオンラインセミナーを開催できたことは、大きな成果であったと感じています。その記録は、千葉大学「グローバル関係学」のWebサイトで確認することができます。これも、中東研究の視座から現在のパンデミックを捉えようとする試みの一つです。

さて、初夏に大輪の花を見ることが叶わなかった駒場のバラ——スルタン・カブース・ローズ——ですが、秋口に再び咲きの一輪を咲かせました。小さな一輪ではありませんが、励まされる気持ちでした。さまざまな制約のなかでも、UTCMESとしては希望を持って活動を続けていきたいと考えています。

文末注

- 1) “Lā Yansā-nā Allāh...l’lān Zayn li-Ramaḍān 2020,”
<<https://www.youtube.com/watch?v=0bF16Ph3uEI&t=89s>>
(2020年12月30日アクセス) .
- 2) Isacar A. Bolaños, “The Ottomans during the Global Crises of Cholera and Plague: The View from Iraq and the Gulf,” *International Journal of Middle East Studies* 51 (4):603–620, 2019.
- 3) フリードリヒ・ローゼン(田隅恒生訳)『回想のオリエント：ドイツ帝国外交官の中東半生記』(法政大学出版局、2003年)、124、196–200頁。
- 4) 同、199頁。

2. 成果論集『アラビア半島の歴史・文化・社会』の刊行

東京大学中東地域研究センターは、2019年度に公開セミナー「アラビア半島の歴史・文化・社会」を開催しました。このたび各セミナーで発表された内容および関連する内容を、成果論集『アラビア半島の歴史・文化・社会』にまとめ、2021年1月に刊行いたしました。

近藤洋平(編)

『アラビア半島の歴史・文化・社会』

東京：東京大学中東地域研究センター、2021年
(ISBN 978-4-906952-02-1)

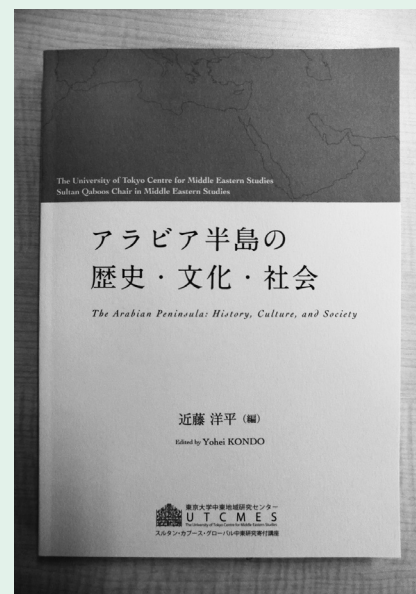
Yohei KONDO (ed.)

The Arabian Peninsula: History, Culture, and Society.

Tokyo: The University of Tokyo Centre for Middle Eastern Studies, 2021 (ISBN 978-4-906952-02-1).

本成果論集は、国立国会図書館をはじめ、国内外の大学図書館、公立図書館、研究機関などに配架される予定です。また電子版を、東京大学中東地域研究センターのウェブサイト(<http://park.itc.u-tokyo.ac.jp/UTCMES/publish>)で公開しています。論集では、アラビア半島の状況について、詳しい内容が記述されています。ぜひご覧下さい。

なお、ご希望の方には、『アラビア半島の歴史・文化・社会』の冊子を郵送差し上げます。東京大学中東地域研究センターのウェブサイト内「お問い合わせ」フォーム(<https://park-ssl.itc.u-tokyo.ac.jp/UTCMES/contact>)から、冊子希望の旨と希望部数をお気軽にご連絡ください。冊子の代金や送料は不要です。



3. 現地滞在・留学記

(1) ロックダウン中のイスラエルにて

李 美奈

(東京大学大学院人文社会系研究科博士後期課程)

はじめに

私にとっては、イスラエルは研究上の現地ではない。私は17世紀ヴェネツィアのユダヤ社会を研究している。4カ月のヴェネツィア滞在中の、夏のヘブライ語コースを受講するためにエルサレムに降り立った時、留学の昂揚感なんてものはなかった。研究対象であるヴェネツィアのラビ、レオネ・モデナはイスラエルの地に移住するチャンスがあったにもかかわらずそれを断ったというが、私もあの美しい水の都にとどまるべきではなかったか、と思いつつ、砂埃舞う乾き切った空気なのか、大学寮の受付を待っていた。この街は現地ではない、というのは、今でもずっと研究上大事にしている立場である。エルサレムはユダヤ教徒(特に超正統派)が人口の大半を占めており、この町で目にする風景から「ユダヤ教とはこういうもの」と無意識を形成してしまうと、マイノリティとして民俗学的・宗教的好奇の目に晒されながら生きてヴェネツィアのユダヤ人が守っていた宗教からは離れてしまうだろうからだ。むしろ、この町は長い歴史上の、および世界のユダヤ教からすれば特殊例である。それでもエルサレムに留学に来たのは、なかなか独学で身につけられなかったヘブライ語を学ぶため、ユダヤ教の文化、とりわけ聖書を取り巻く分厚い学問や民話などの文学的要素を学ぶため、そしてヘブライ語の文献や史料を収集するためである。

最初の半年間はただ慣れるだけで精一杯だったように思う。すでにこちらに留学していた日本人に頼りきりになりながら、ようやく生活を作っていた。鍋の

蓋だけが欲しくて何度も探しに行くもなかなか見つからなかったことを覚えている。大学や国立図書館では頻りに興味深い学会や講演会が開催され、その数があまりにも多いのでどれを優先すべきか頭を悩ませ、時々授業をすっぽかしながら参加した。イスラエルにいて、中近世のイタリア・ユダヤ史に絞ってもこれだけの研究者が集まる機会があるのだ、と感動した。

2020年の冬休みの間はまた、イスラエルではコロナウイルスはどこか他人事だったように思う。友人は国内旅行に行ったり一時帰国したりしていた。2月下旬から国内での感染例が出始め、東アジアからの入国が制限され、時期を同じくしてアジア人への差別的行動が報道されるようになった。こうした行動はごく一部で私は不安を覚えたりはせず、むしろ日本での中国系の方への差別の方が酷いような印象を持っている。また、ヘブライ大学は中国や韓国からの留学生が多く、留学生との連帯をアピールする動画が大学から発表されたりもした。3月初旬、テルアビブで開催されたイタリア・ユダヤ史の研究会にイスラエルの研究者とイタリアからの研究者が集まった。ヘブライ語と英語とイタリア語が混じる会場で、すでに感染の勢いがつき始めていたイタリアの様子を聞いた時、イスラエルの方がもっと深刻な状況になるとは思いもよらなかった。

ロックダウン始まる

最初のロックダウンが始まったのは3月15日日曜日、ちょうど冬の学期が始まる日であった。大学は直前まで対面で授業をやるつもりだったようで、キャンパスに入れる学生の条件を何度もメールで知らせていた。ただし、3月2日に3度目の総選挙があり、3月10、11日はプリーム祭りで中心街は仮装した人々でごった返しており、感染の拡大は必至だった。町の

ほとんどのサービスが止まっている安息日の間に、週明けからの完全ロックダウンが政府で決定されたが、何をどこまで制限するのはそこから段々と具体化されていった。大学はすぐに学期の開始の延期を発表したが、図書館がどうなるのか15日の朝になってもわからなかったため、私はひとまずキャンパスに行ってみることにした。留学生用の図書館は開いていたので20冊ほどを借り込み、中央図書館に足を向けると、入り口が閉鎖されたまま中で職員がひっきりなしに電話をしていた。しばらく待つと入り口に閉館の知らせが貼られたので、なぜか開いていたカフェに入って、マスクもせず2mの距離も取らずに喋っている人たちに背を向けて一休みした。ロックダウンの決定の速さと、それにどうやってついていこうかというのかよく飲み込めていない現場との温度差を感じながら、この先どうなるのだろうと考えていた。

ロックダウン下の生活

ロックダウン中の困難は、まず政府決定の速さと情報収集にあった。当然ながらロックダウンは初めての試みなので、とりあえずやってみて効果が見られなかったり問題が出れば、行動制限のレベルを変えたり方針を詳細化したりしたが、決定の適用が始まって運用が具体化せず、何ができて何が出来ないのかわからなかったりする。私にとっては図書館のサービスが一番気になるところだったので、常に情報を追ってはいるが、状況の変化は本当に目まぐるしく、1日のうちに開館方針が2度変わることもあった。もともとイスラエルは前もって準備をせず即興的な対応をする傾向はあるが、ここにきてそれが増幅し、他方で先の見えなさに慣れていてなんとか回っていくという長所にもなった。大学院課が出勤しておらず2年度目の研究員受け入れが終わっていても、留学生課でビザ更新用に翌年度の在籍を証明するレターを出してもらえたりした。ビザ更

新に行ってみれば職員に感染者が出たのでビザ課は閉鎖、他課で対応することになり、慣れない職員が間違った申請方法を指導して申請者全員やり直しになり、ビザ課職員を1人呼んでなんとか事なきを得た。

イスラエルに在ることの意味をどこに見出すかは、特に図書館が閉館中には大きな問題となった。授業は全てオンラインで実施され、最も厳しいときには原則自宅から100m以上出ることができず、文献は電子で所蔵されているものを使って研究を継続することはできたが、全て日本でもできることではないか、と思ったりもした。間違っても察にコロナウイルスを持ち込んではいけないので、制限が緩くなったとしてもバスに乗って数ヶ月ぶりに開館した国立図書館まで出かけるのは気が引けてしまうし、現地の様子などはテレビのニュースでようやく知る有様である。現在は、日々変化する制限レベルに合わせて、大学図書館がなるべく完全閉鎖はしないように努めており、開館のタイミングを狙って文献収集を思う存分やってから帰国するつもりではあるが、1回目のロックダウン時は本当に先が見えず、状況によっては早めに留学を切り上げようかとも考えた。10月に1日の新規感染者が1万を

超えた時は(イスラエルの人口は900万しかない)、日本にいた方が安全かもしれないとも考えた。

日本と同様に、コロナウイルスはイスラエル社会がもともと抱えていた問題をより鮮明に浮き上がらせている。貧困ゆえに衛生管理が難しく、狭い空間に大人数が暮らし、通信環境も整っていない超正統派は、価値観の違いと政府に対する不信感も相まって、最も感染率の高い集団となった。彼らがロックダウンに素直に従わないことに批判が集中し、社会分断が大きくなるような印象を受けている。アラブ系も超正統派と並んで貧困層を形成しており、サービス業の長期休業により最も経済的打撃を受けやすく、またオンラインでの教育を受ける環境が弱いという格差の他に、コロナウイルスやその対策に関する情報が各マイノリティ言語に翻訳されにくいという問題も起きている。

宗教と新型コロナウイルス

イスラエルに限らずヨーロッパでも、宗教伝統とコロナの相性の悪さが話題となったが、私の考えではコロナと相性が悪いのは何も宗教伝統に限った話ではない。宗教が行動制限の対象になりやすく、また批判の矛先にもなりやすい光景は、我々が近代的価値観に基づいて、そこからこぼれ落ちたものから形成されたような「宗教」を断じているという、宗教学で散々批判されてきた構図を目の当たりにするようだった。結局は世俗派も、2回目のロックダウンとなるとすでに弱体化している経済基盤への打撃が大きく、閉鎖要請に従わなかったり政府批判デモを継続したりしていた。イスラエルは2019年春の選挙から安定した政権ができておらず、現在も再選挙が控えている。意思表示の場であるデモを制限することは民主主義の根幹に関わるが、しかしデモが許されるのに屋外での大規模礼拝が許されないのは何故かという疑問も生じる。社会システムのうち、何を最も重視し感染のリスクを冒して

まで守るかはそれぞれであり、その多様性がコロナウイルスを巡って噴出し、自らの価値観も相対化されるような日々である。より身近には、大学においても、7月の試験をキャンパスでやるかどうかで運営側と学生との紛糾があった。イスラエルの大学は日本の大学よりも、成績に対する大学側の責任が重いように感じられる。自分や家族の健康リスクを冒してまで正当な成績にこだわる必要はないと考えた学生らが運動を起こし、ヘブライ大学ではオンライン上での試験を勝ち取ったが、その後、試験中の不正への調査が大規模に行われ、成績の剥奪をめぐる学生団体と教師陣が争っていた。

また、イタリアとイスラエルでのユダヤ教のコロナ対応のニュースをみていると、宗教と社会の関係や宗教共同体同士の関係の一端が垣間見える印象を持った。イタリアではユダヤ教はマイノリティであり、大人数が集まって礼拝する様子はキリスト教のそれよりも非難を浴びやすい。それゆえにイタリアのユダヤ教団体は早々に祝祭のオンライン開催を決定し、また夏にいつか感染が落ち着いても、なかなか礼拝を再開できずにいた。同時に、彼らはこのような形で祝うことが伝統から外れていることを正統的な立場から批判されるリスクも抱えており、彼らはこの決定を「タカナー」(ラビ伝統に基づかない地域限定の決定)と位置付けていた。他方で超正統派が伝統を遵守することに熱意を注いでいたイスラエルでは、ユダヤ・アイデンティティを守ることとコロナを抑えることのせめぎ合いの間で、礼拝に対する制約をチーフラビが「ハラハー」(ユダヤ教の基本的な戒律の規則)と呼び、国民にこれを守るように促していた。

ユダヤ教の礼拝は自発的な性格が強いのだが、コロナ規制によって逆に組織化するという現象も見られた。大学寮ではさまざまな国から来た学生が、近い慣習を持つ者同士で集まってホールなどを利用して礼拝をあげていたのが、室内での集団礼拝



2回目のロックダウン以降、大学図書館は学習スペースとして開いている。貸出は事前にフォームに入力するとまとめて入口に置いてくれる。筆者撮影。

が禁止になり、建物の外で思い思いに集会するようになり、最近では屋外での集会も管理すべく門の前の寮の広場に全員が集まって礼拝をするようになっている。逾越の祭りの仮庵やハヌカーのハヌキヤを、一年目では個人的に設置して勝手に祝っていたのが、二年目では寮の管理下に置かれることで、より立派な施設になっていたのは興味深かった。



1年目にぼつんと建った仮庵(上)と
2年目の管理下で設置された仮庵(下) 筆者撮影

おわりに

現在も3回目のロックダウンの最中で、寮とその周辺で見る風景とニュースを介して得る情報からイスラエルのコロナの状況を知るのみで、以上に述べたことも非常に狭く偏った視点を通して感じたことにすぎないことを確認しておく。素直に言ってしまうと充実した留学生活とは言えないし、現地から、と言っているものかもわからないが、現地調査報告の代わりにさせていただきます。

(2) 新型コロナウイルス禍とトルコ留学

岩田和馬

(東京外国語大学大学院総合国際学研究所
博士後期課程)

はじめに

2019年11月に発生が確認され、その後全世界を混乱に陥れた新型コロナウイルスは当然私の研究計画及び留学計画にも大きな影を落とした。100年に一度の疫病の大流行とも言われる未曾有の事態の中、私は無謀にも2020年11月にトルコ共和国のイスタンブルへ留学を敢行した。このような状況下での留學生活と研究状況をここに記すことで、これから留学を予定している方にとって何か参考になればと思う。私が基本的に家に引きこもっているため、退屈で地味な留学記になると思うが、何か一つでも有益な情報を提供できれば幸いである。また、本稿は2020年6月-2021年1月における状況をもとに執筆されていることにもご留意いただきたい。そのため、最新の情報に関しては在日トルコ大使館のホームページなどを参照していただきたい。

本題に入る前に簡単に自己紹介をした。私は東京外国語大学博士後期課程の学生であり、同業組合の分析を通して18世紀イスタンブルにおける船着場社会の社会経済構造の研究を行っている。今回の留学に際して私は、松下幸之助志記念財団松下幸之助国際スカラシップと三島海雲記念財団学術研究奨励金を獲得することで、トルコ共和国に研究留学という形で渡航することができた。2021年1月現在、私はトルコ共和国イスタンブルのボアジチ大学に客員研究員という肩書で籍を置きながら史料調査を行っている。当初の計画では、遅くとも9月までに出国するはずであったが、結局11月に出国する運びとなった。

ビザ申請

まずは渡航前のビザ申請手続きの顛末

を述べていきたい。ビザ申請においては、新型コロナウイルスの影響に加えて自らの行動の遅さと手際の悪さのために発給までに大幅な遅れが発生した。この点に関しては、今後ビザ申請をされる方にとっての反面教師として役立たせていただければと思う。

今回の渡航で私は留学生ビザではなく研究ビザを取得した。必要となるのは、①トルコ共和国外務省のウェブサイトを通して作成した申請フォーム、②英文の在学証明書、③滞在費を証明する書類、④パスポートのコピー、⑤トルコの受け入れ大学からの招聘状、⑥5×5の証明写真2枚、⑦現金6600円である。ウェブサイトでの申請フォームの作成に際しては在学証明書などをアップロードする必要があるため、事前に必要書類をデータ化しておくことで申請フォームの作成がスムーズになる。

ビザ申請は全ての書類仕事と同様に、緊急事態下になくとも煩雑かつ退屈極まり、私のような怠惰な人間は気付くとつい先延ばしにしがちである。そんな私が奮い立ってビザ申請手続きを始めようとしていた3月頃、不幸にもビザ発給が停止された。当時はビザ申請が再開される目処もついておらず、いつ渡航ができるかわからない状態であった。結局6月になってビザ申請の受付が再開され、そこから申請書類の準備を始めることとなった。

申請に必要な書類のうち、③は奨学金を支給する財団の担当の方に連絡を取りすぐに発行していただいたが、問題は⑤の受け入れ大学からの招聘状であった。まずは以前からお世話になっていた受け入れ大学所属の先生に連絡を取り、そこから学部長へ英文のCV、研究計画書、カバーレターを送付するように指示を受けた。学部長に連絡を取り、上記の書類を送付するとすぐに返信があり、教授会での審議を経て採択され、事務手続きが済んだ後に招聘状を送付していただけるとのことであった。しかし肝心の招聘状は待てど暮らせど送られてこず、結局書類を受け取ったのは

やりとりを始めてから1ヶ月半ほど経った9月中頃であった。大学が閉鎖されているために事務手続きが遅延することは予想していたものの、流石に1ヶ月以上待たされるとは考えていなかった。結局ビザの申請は大幅に後ろ倒しとなった。今思えば定期的に確認と催促のメールを送るべきだったのだろう。

招聘状を受け取るとすぐに必要書類を大使館に提出した。通常、研究ビザは1ヶ月ほどで発給されるとのことだが、大使館のウェブサイトには通常よりも発給手続きが遅れる可能性がある旨の記載があった。発給期間について職員の方に直接問い合わせしてみたが、発給再開後の研究ビザの申請であり、発給期間は不明とのことであった。結局6週間後の10月最終週にビザが発給され、受け取りのために保険の契約書とパスポートの原本を提出することを求められた。通常、所属大学を通すことで大幅に割引かれた保険料で留学保険を契約することができると思っていたが、今は学生の海外渡航を基本的に禁止しているため対応できないと言われ、個人で保険に加入することになった。このため、割引の無い一般料金で保険契約することとなり、出国を前にして予想外の出費が嵩んだ。保険会社の方には迅速に対応していただき、必要書類を大使館に提出すると、10日ほどでビザが発給され、11月20日に出国した。

以上の経緯からも分かる通り、ビザ申請を開始するまでの行動が遅く、招聘状の発行などにかかる時間を考慮していなかったために当初の予定よりも大きくずれ込んでしまった。ビザ申請受付の再開がいつになるかわからず、受け入れ大学に提出する研究計画の日程を確定させられないなどの理由はあったが、もう少し早く行動を開始していれば、9月中は難しくとも10月には渡航できていたのではないかと反省している。言うまでも無いが、必要書類の作成は早ければ早いほど良いことは私のビザ申請の顛末からもお分かりいただ

けるだろう。もしも今後もこのような感染状況が続くようであれば、ビザ申請には通常より1-2ヶ月は余分にかかることを想定して申請手続きに臨むことを強くお勧めしたい。

コロナ下のイスタンブル

私がイスタンブルに到着したのは2020年11月21日土曜日の午後であった。トルコではこの日から午後9時-午前5時の外出禁止が始まり、飲食店の店舗営業が全て禁止されていた。一方でテイクアウト及びデリバリー営業は許可されており、夜になると人出が減る代わりにデリバリーのバイクが縦横無尽に通りを駆け巡る。フードデリバリー用のスマートフォンアプリケーションも普及しており、短期間でのデリバリーサービスの圧倒的な発達に驚かされた。通りではほとんどすべての人がマスクを着用しており、強制されているとはいえ、以前はマスクをしている日本人を見ると病人と勘違いしてギョッとしていたトルコ人が全員マスクを着用している光景には感動すら覚えた。

さらに2週間ほど経つと外出禁止令は週末終日にも拡大された。また、原則としてはHESコードと呼ばれる健康管理番号の提示が図書館やショッピングモールなどに入場する際に求められることになっている。2021年1月15日からは公共交通機関利用のための交通カードの情報をHESコードと紐付けなければ利用できなくなった。このように様々な対策は行われているものの、現在のところ政府は以前のような全面的なロックダウンや外国人の入国規制を行う気は無いようで、私が渡航した際には驚くことにPCR検査の陰性証明の提出すらも求められなかった。さらに外国人観光客には各種制限が適用されず、スルタン・アフメト地区などの観光地では外国人観光客で賑わうにわかに信じがたい光景が広がっている。私は旅行者でないの

自由に移動する外国人旅行者たちを、指を加えて羨ましく思いながら眺めている。

これは渡航後に気づいたことだが、週の多くの時間を家で過ごすとは深刻な日光不足と運動不足に苛まれ、果ては生産性の低下に直結する。現在滞在しているアパートは建物の密集地帯にあり、部屋には日中でも部屋に光が入らない。そのため、意識的に外出しないと次第に体が重たくなり、脳のパフォーマンスも如実に低下する。トルコに限らずロックダウンなどのために自由に外出できない国に留学する際には家を決める上で確実に日光が入る家を選ぶことが、研究生活及び私生活の両面において非常に重要であるということは強調しておきたい。また、ロックダウンの最中でも効率的な研究を行なうためには、定期的な運動と規則正しい生活リズムを維持することにも十分注意を払わなければならない。以前よりも意識的にストレッチや軽い運動を行うようになった。

平日日中には定期的に、史料に登場する船着場や宿泊施設、市場の位置などを把握するためにしばしば釣りや「フィールドワーク」と称したイスタンブルの旧市街で運動を兼ねた散歩に出かけるようにしている。しかしながら、飲食店が全て閉まっているため、疲れた場合は気温が低い日でも公園のベンチなどで休まなければならない。エミノニュなどの外国人観光客の多い地区では、間営業するカフェがあるが、多くは密室であり感染リスクを考えると利用しないことが賢明であろう。



エミノニュのガラタ橋：日本と同じくコロナウイルス発症以後釣りを始める人が増えており、元から「密」な釣り場であったガラタ橋は連日過密状態になっている。(筆者撮影)

コロナ下の研究

これはトルコに限った話ではないが、様々な制限のために人と会うことができないことが研究の最大の足かせとなっている。研究会や学会は日本と同様に全てオンライン形式で開催されており、これらの情報はインターネット上で事前に公開されているものの、人から教えてもらう機会が無いと定期的な複数の媒体に目を通して積極的に情報を集めていかないと見逃してしまう。既にいくつかの研究会を開催終了後に知り悔しい思いをした。また、現地の指導教官などに気軽に質問をする機会が得られないことも、研究を進める上で大きな障害となっている。

現在のところ私は、イスタンブールに所在する大統領府オスマン文書館とイスラーム研究センター図書館で史料調査を行っている。その他の図書館は現在利用していないため、その現状についてお伝え出来ないことはお許しいただきたい。いずれの施設に関する情報も公益財団法人東洋文庫のウェブサイトには詳しい情報が載っているため、ここではコロナ下の現在における利用状況を述べていきたいと思う。

大統領府オスマン文書館の開館時間は通常、平日8:30-18:00、土曜日8:30-16:00であるが、現在は平日10:30-16:30のみに短縮されている。そのほかの利用状況に関しては大きく以前と異なるところはないが、政府が発行しているHESコードの提示を入り口で求められる可能性があるため、事前に取得しておく必要がある。



ベイオール市庁舎：第二次ナゴルノ＝カラバフ紛争停戦時には、勝利を祝ってアゼルバイジャン国旗が北キプロス共和国の旗とともに掲げられていた。(筆者撮影)

ウスキュダルに位置するイスラーム研究センター図書館の開館時間は平日休日問わず9:00-23:00であったが、現在は8:30-19:00に制限されている。また、現在は予約制を通した入場者数制限も行なっている。予約の枠は平日の午前(8:30-13:30)と午後(14:00-19:00)の2つに分かれており、毎週日曜日23:00-月曜日22:59、月曜日23:00-火曜日22:59、火曜日23:00-金曜日それぞれ2枠、週最大6枠の予約をすることができる。しかしながら利用者希望者が多く、日曜日に予約が始まると20分ほどで全ての枠が埋まってしまうため、実際は1週間に2コマしか予約することが出来ず、運よくキャンセルが入った枠に入れたとしてもせいぜい4回分の予約が取れば良い方である。

法廷台帳は1階右側の8台のパソコンで閲覧及び取得申請を行うことができるが、現在は利用者の距離を取らせるために4台しか稼働していない。前年に利用した際には利用者が多く、早めにパソコンを確保しないと全て埋まっていたが、現在では利用者が制限されており、あぶれることは無い。当初週5日ほどのペースでイスラーム研究センター図書館での史料調査を行う予定であったが、現状では1週間のうち半日が2回ほどの調査時間しか確保できないため、予定よりもかなり調査のペースが遅れている。大統領府オスマン文書館では、史料のカタログ検索ができるため比較的短時間のうちに史料調査を行うことが

できる一方で、イスラーム研究センターの法廷台帳にはカタログが存在しておらず、台帳を選択してページごとに目を通さなければならない。台帳1冊のページ数は70から200ほどであり、法廷によりばらつきがあるが多くの台帳はおよそ100ページから成る。私が調査の対象としているイスタンブールには複数の法廷が存在しており、ガラタやウスキュダルといったイスタンブール周辺の法廷台帳まで含めると18世紀の物だけでも膨大な量に及ぶ。現在では利用制限のために、当初の予定よりも目を通すことができる台帳の絶対数が限られてしまい、博士論文で利用する史料の範囲を狭めざるを得ないと考えている。

しかしながら必ずしも現況の全てが悪く作用しているわけではない。自宅で落ち着いて作業する時間が増えたため、取得した史料を精読する時間が多く取れるようになったことは良い面の一つであると言えるだろう。また、地図や表の作成といった時間のかかる作業をまとめて行うための時間も取ることができる。いまだに現状に即した「正解」の研究リズムを完全に掴むには至っていないものの、やり方によっては平時とは全く違う形にはなるかもしれないが、新型コロナウイルス下においても十分なパフォーマンスを発揮することは可能であると思われる。

おわりに

「多分なんとかなるだろう」という軽い考えで飛び出すように日本を出て留学に来たものの、最初の二週間は見慣れていた姿とは全く異なるイスタンブールに戸惑いを覚え、いまだにこの新たな状態に慣れるため手探りをしている状態であることは否めない。気を抜いて日光の入らない家に引きこもっていると次第に時間感覚がなくなり、生活リズムが崩れて作業に身が入らなくなってしまい、ほとんど研究が進まない日もある。まだトルコに来たばかりではあるが、もっとうまく立ち回っていれば、という後悔が無いわけではない。しか

しながらやはり、現地で史料調査をして小さいながらも日々新たな発見に出会うことができるのは大きな幸福である。今後も現状下でより効率的な研究活動ができるように自分なりに努力し、研鑽に励みたいと思う。

思えば、学部生時代の指導教官であった新井政美先生から留学中に発生したクーデタ下での生活についてお話を聞いたことがあった。当時は大学院に入ってトルコに長期留学に行くことも考えていなかった

ため、単なる面白武勇伝として拝聴していたが、非常事態下における留学という点では共通することもあり、今になるともう少し詳しくお話を伺っていただければ今回の留学にも何か役立てられたのではないかなとも思う。私自身が未だ疫病下での留学という事態に適応していないこともあり、深い情報を提供できなかった気もするが、誰かにとって何らかの形で役に立つものを提供できたとしたらこの上ない幸せである。



ガラタのクルシュナル・ハン：ビザンツ時代に建設され、16世紀にミマール・スィナンによって現在の形に設計された隊商宿。現在も現役で工房や商店が営業しており、一室はアートギャラリーとして利用されている。(筆者撮影)

●UTCMES スタッフ紹介 (2021年3月31日現在)

〈スタッフ〉

高橋 英海 (センター長、兼務教授)
森元 誠二 (客員教授)
近藤 洋平 (特任助教)
瀬口 美加 (事務補佐員)

杉田 英明 (兼務教授)
鈴木 啓之 (特任准教授)
倉澤 理 (バフワーン文庫・特任研究員)

〈UTCMES 運営委員〉

高橋 英海 (委員長、大学院総合文化研究科教授)
橋川 健竜 (総合文化研究科教授・グローバル地域研究機構長)
黛 秋津 (総合文化研究科准教授)
杉田 英明 (総合文化研究科教授)

齊藤 文子 (総合文化研究科教授・副研究科長)
真船 文隆 (総合文化研究科教授)
菊地 達也 (人文社会系研究科准教授)

〈スルタン・カブース・グローバル中東研究寄付講座運営委員〉

高橋 英海 (委員長) 齊藤 文子 橋川 健竜
真船 文隆 黛 秋津 杉田 英明

●発行者情報 UTCMES ニュースレター VOL.18 2021年3月31日発行

発行：東京大学大学院総合文化研究科グローバル地域研究機構中東地域研究センター (スルタン・カブース・グローバル中東研究寄付講座)
〒153-8902 東京都目黒区駒場3-8-1 TEL：03-5465-7724 FAX：03-5454-6441
<http://park.itc.u-tokyo.ac.jp/UTCMES/>

印刷：佐川印刷株式会社

〒140-0004 東京都品川区南品川5-2-10 TEL：03-5715-0912 FAX：03-5715-0931